



Major Barbara

1960. 9

上映映画解説

No. 66

バーバラ少佐

Major Barbara 13巻

英ガブリエル・パスカル・プロ1941年作

原作・脚色・台詞……バーナード・ショー

製作・監督……ガブリエル・パスカル

音楽……ウィリアム・ウォルトン

〔主演者〕 ウェンディ・ヒラー、ロバート・モーレイ、
レックス・ハリスン、ロバート・ニュートン

「バーバラ少佐」とバーナード・ショー

清水 晶

19世紀の終りから20世紀の始めにかけて、世界の劇壇に一時代を劃したジョージ・バーナード・ショー(1856~1950)は、有名な映画ざらいとして知られていた。映画がまだ字幕まじりの無声だった頃のことだが、「映画が芸術になる道はただ一つ、それは画面が全部字幕になることだ」などという彼一流の皮肉をはいて、彼の劇作の映画化の申し出には頑として応じなかった。

それもその筈、彼の作品は、普通一般の劇の通念と違って、人物の動きで示すドラマティックな要素が少なく、何かの主義や観念にこりかたまった人物同士の、饒舌な言葉のやりとりの中に盛られたシニカルな機智や逆説による、いわば戯曲の形を借りた思想エッセイとでもいうべきものであるから、それを“言葉を持たない”映画に移しかえることは、彼として到底許しがたいことだったろうし、映画が営利主義の申し子となっていることも、潔癖な彼の映画ざらいに拍車をかけたに違いない。

映画がやがてトーキーとなり、言葉を持つようになってからも、暫くは彼がこのかたくなな態度を崩さなかったのは、映画企業のありかたに対する不信からであろう。その彼が、どういう風の吹きまわしか、海水浴場で知り合った一映画プロデューサーに、彼の全作品の映画化権を与えた。それまで独立プロデューサー

として、伊、仏、独、英の各国を転々していたガブリエル・パスカルがこの幸運の主である。

こうして、パスカルのプロデュースのもとに(ときにはパスカル自身、監督も兼ねて)、「ピグマリオン」(1938)、「バーバラ少佐」(41)、「シーザーとクレオパトラ」(46)、「アンドレクロスと獅子」(52)の4本のショウ作品の映画化が実現した。この中、わが国で一般に封切られたのは、後の二作だけだが、「ピグマリオン」は、この「バーバラ少佐」とともに、国立近代美術館のフィルム・ライブラリーに収められている。

これらの映画が作られた頃は、ショウはすでに80才を越えて、功成り名遂げた完全な隠遁生活に入っていたが、驚いたことには、彼の歿後の製作である「アンドレクロスと獅子」を除いて、前三作ごとく彼に彼が脚色者として名を連ねている。その上、この「バーバラ少佐」では、始めに観客に宛てたショウ自筆の手紙がインサートとして示されるが、そこにもられた彼一流の皮肉と自信と並んで、そこに自作の映画化を他人まかせには出来ない、極度に潔癖なものを感じたのは私だけであろうか。

50年、ショウはこの世を去り、パスカルも54年に死んで、やかましかったショウ作品の映画化権の独占も終った。最近「悪魔の弟子」がパート・ランカスター一党によって映画化されたのはこのためだが、もし、ショウが生きていたら、きっと彼自身脚色の筆を執って、あんなランカスターごのみの改変は許さなかったことだろう。

さて、本題に入って、「バーバラ少佐」は、ショウ1905年の作である。1905年といえば、わが国ではちょうど日露戦争のときに当り、西半球では第一次モロッコ事件によって独仏間の関係が著しく悪化し、すでに大戦の前駆の徴候を呈していた。ウィルヘルム二世治下のドイツは勿論のこと、ヨーロッパの列強は揃って軍備の拡充に努め、後世でいうところの軍需工業の独占化が緒についた頃であった。

一方、下層階級への布教を目標に、ロンドンに発足

した救世軍は、当時すでに40年の歴史を持っていたが、貧民たちを教会に送りこもうとした当初の運動に失敗してからは、非教会主義と社会事業に転じて、教会中心の教派に対して野党的な奮闘を続けていた。

こうした時代相の中で、独占資本の威力が、下層階級に対するひたむきな宗教的努力にこともなげに打ち勝って行くというこの作の主題は、今日では必ずしも目新しいものではないかもしれないが、当時、こうしたことを、このような形で表現してみせるということ自体、きわめて斬新な、予言者の勇気を必要とすることであったに違いない。これに伴って、台詞がいささか観念的なのも、ショウ作品の特徴である。

この映画が作られたのは、原作が書かれてから36年後の1941年、ちょうど第二次大戦のさなか、イギリスがダンケルクの苦杯からようやく反攻の体制を固めた頃のことであり、これを今こうしてわが国で見るのは、それからまた20年近くたって、ご存じのような米ソ冷戦のさなかである。今となってはテーマそのものに、原作発表当時のような新鮮さは望めないとしても、一大軍需工場のシーンを前にしては、歴史はくりかえすの感が深い。

出演者は、1956年に物故したロバート・ニュートンを除いては、主演のウェンディ・ヒラーを始め、レックス・ハリスンにしても、ロバート・モーレイにしても、今日なお健在、ウェンディ・ヒラーは昨年、「旅路」の好演でアカデミー助演女優賞を受けている。珍しいのは、デボラ・カーがまだ少女気のぬけない可憐な姿を見せていることで、彼女は当時19才、これが彼女の映画初出演であった。

スタッフの中に、編集者としてデビッド・リーンの名が記されているのも、そぞろ時代を感じさせて懐しい。リーンは当時、劇映画の編集に専門にたずさわり、監督として名乗りを挙げたのは、これから2年ほど後のことである。

国立近代美術館フィルム・ライブラリー